

①天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

遠江国	7首	18首
相模国	3首	8首
駿河国	10首	20首
上総国	13首	19首
常陸国	10首	17首
下野国	11首	18首
下総国	11首	22首
信濃国	3首	12首
<b>上野国</b>	<b>4首</b>	<b>12首</b>
武蔵国	12首	20首
84首		166首

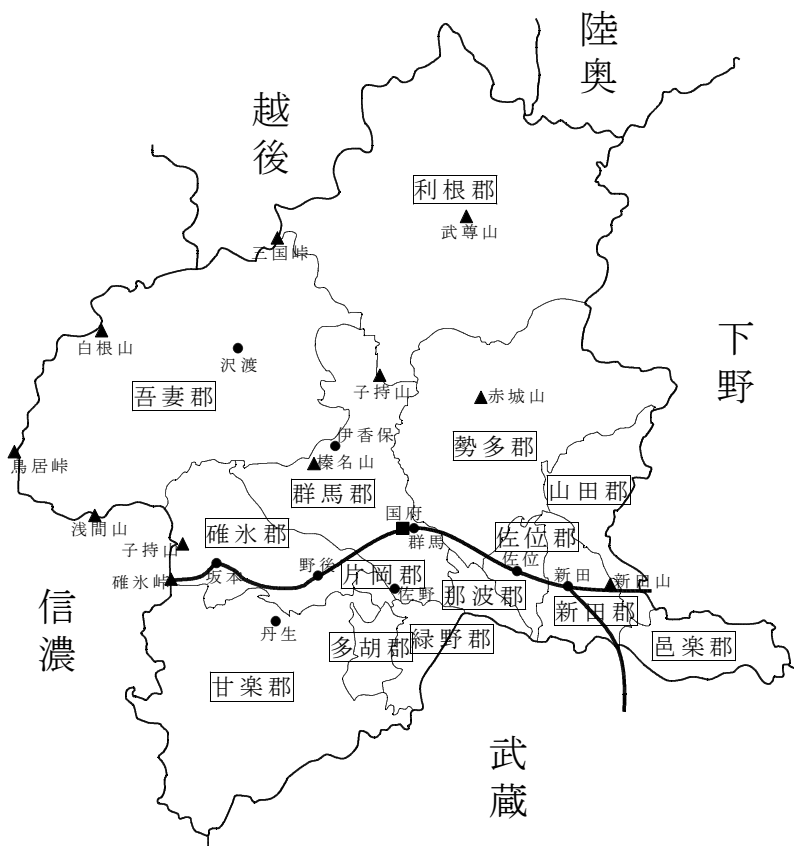
②昔年防人 … 8首  
合計 92首

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <b>上野 22首</b> 下野 2首 陸奥 3首	東海道 東山道
	譬喩歌 90	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <b>上野 3首</b> 陸奥 1首	東海道 東山道
国名不明	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌 140	17首 112首 5首 5首 1首	
		合計 230首	

「上野国東歌をよむ」

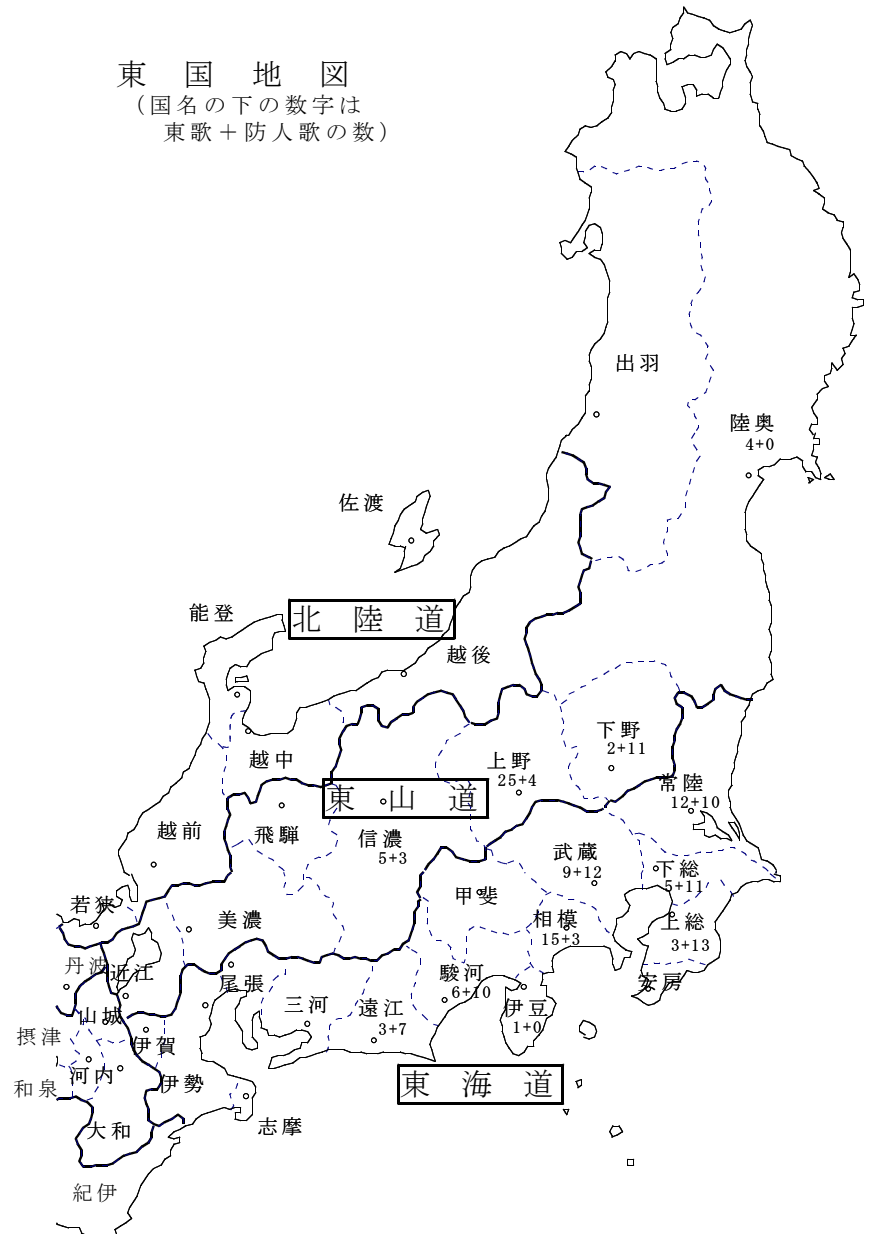
群馬県立女子大学 北川和秀

平成二十三年十一月十一日  
群馬県立女子大学新館第3講義室



※郡界は寛文八年（1668）の上野国郷帳の村名に基づき推定した。

東国地図  
(国名の下に数字は東歌+防人歌の数)



3402 日の暮ぐれに碓氷うすひの山を越ゆる日は夫せなの袖そでもさやに振らしつ（東歌相聞）

碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになりました。

4407 ひな曇くもり碓氷うすひの坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（防人歌）

右の一首は、他を田た部べ子こ磐い前まのなり。

碓氷の坂を越えるとき、彼女のことが恋しく思われて、忘れるなんてとてもできないことだなあ。

4404 難波なみ道みちを行きて来くまでと吾わ妹子ぎもこが着きけし紐ひもが緒を絶たえにけるかも（防人歌）

右の一首は、助すけ丁の上よ毛ぼろ野う牛しか甘かのなり。

難波への道が無事に行つて帰つてきてくださいと言って妻が縫い付けてくれた紐がついにすり切れてしまったことだなあ。

3421 伊香保い嶺ねに雷かみな鳴りそね吾わが上へには故ゆゑはなけども子らによりてそ（東歌相聞）

伊香保の峰に雷よ鳴つてくれますな。私にとっては別にどうということはないのですが、あの娘が怖がるものでね。

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾あが恋のみし時なかりけり（東歌相聞）

伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言いますけれども、私があなたを思う恋心ばかりは、止むときがありません。

\*参考

「韓から亭どまり能の許この浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（三六七〇）

「荒津あらつの海潮しほ干潮満ひち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」（三八九一）

3423 上毛野かみつけの伊香保の嶺ねろに降ふる雪ゆきの行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（東歌相聞）

上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではありませんが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

\*参考

「わが屋戸やどの君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ」（一〇四一）

3403 吾あが恋は現在ましかもかなし草枕多胡たごの入野いりのの将来おくもかなしも（東歌相聞）

私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来おくも切ないことです。

\*参考

「……三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給ひて、多胡郡と成す。……」（多胡碑 七一年）

「伊香保ろの岨そびの榛原はりはらねもころに将来おくをなかねそ現在ましかし良よかば」（三四一〇）  
昭和三十年まで存在した入野村は、明治二十二年の町村合併の折、小串・黒熊・深沢・石神・中島・小暮・馬庭・岩井・多比良の九ヶ村が合併して成立。村名は、東歌の「多胡の入野」が黒熊附近に比定されるといふ説を採用して命名された。

3411 多胡たごの嶺ねに寄綱よせつな延はへて寄すれどもあにくやしづしその顔よきに（東歌相聞）

多胡の峰に引き綱を掛けて引き寄せるように、頑張つて言い寄つてみたけれど、ああ、憎らしいよ、水底に沈んでびくともしない石のようなやつめ。（ちつとも靡かないでさ。）いくら顔が美しいからって。

3420 上毛野佐野の舟橋ふなはし取り放し親は離さくれど吾わは離さるがへ（東歌相聞）

上野国の佐野の舟橋をばらばらにしてしまうように、親は二人を引き離すけれど、私はあなたと離れたりしませんよ。

\*参考

「……佐野の三家と定め賜ひし健守命……」（山上碑 六八一年）

「上野国群馬郡下賛郷高田里の三家の子孫……」（金井沢碑 七二六年）

「橋は あさむづの橋。長柄の橋。……佐野の舟橋。……」（枕草子六四）

△「駒とめて袖うち払ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」（新古今集六七）

△「苦しくも降り来る雨か三輪の崎佐野の渡りに家もあらなくに」（万葉集二六五）

「所は同じ名の、所は同じ名の、佐野のわたりの夕暮れに、袖うち払ひて、お通りあるか篠掛の。」（謡曲舟橋）

「駒留めて、袖うち払ふ蔭もなし、佐野のわたりの雪の夕暮れ、かやうに詠みしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。これは東路の、佐野のわたりの雪の暮れに、迷ひ疲れ給はんより、見苦しく候へど、ひと夜は泊まり給へや。」

（謡曲鉢木）

3418 上毛野佐野田の苗のむら苗に事は定めつ今はいかにせも（東歌相聞）

上野国の佐野のたんぼの苗を使った占いで結婚を決めました。今さらどうにかできましようか。（できないでしよう。）

3406 上毛野佐野の莖立ち折りはやし吾は待たむ忽今年来ずとも（東歌相聞）

上野国の佐野の青菜を折ってお料理を作り、私はお待ちしますわ。たとえあなたが今年はいらっしゃらなくとも。

3405 上毛野乎度の多杼里が川路にも子らは逢はなも一人のみして（東歌相聞）

上野国の乎度の多杼里の川へ行く道で、あの娘が逢ってくれたらなあ。一人だけで。

3405 或本 上毛野小野の多杼里が安波治にも夫なは逢はなも見る人なしに

上野国の小野の多杼里の安波治でも、あなたが逢ってくれたらなあ。誰にも見られないで。

3413 利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（東歌相聞）

利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに、やみくもに渡って波を受けてしまったように、ばったりと出会ったあなたですこと。

3540 左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（未勘国東歌相聞）

左和多里の乙女に出逢ったけれど、私が乗る赤毛の馬の歩みが速いので、言葉を交わさないまま来てしまいました。

3417 上毛野伊奈良の沼の大藺草外に見しよは今こそ益れ（東歌相聞）

上野国の伊奈良の沼に生えている（まだ刈り取る前の）大藺草と同じように、あなたのことを傍らから見ていただけの頃よりも、恋人同士になった今の方が恋心は増していますものを。

3414 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば（東歌相聞）

伊香保の高い井堰の上に現れる虹はつきりと見えるように、そのようにはつきりと二人の仲が明らかになってしまっうほど一緒に寝ていられたらなあ。

3494 子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（未勘国東歌相聞）

子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をしたいと私は思います。あなたはどう思います？

3408 新田山嶺には着かなな吾によそり間なる子らしあやに愛しも（東歌相聞）

新田山がどこの山並みとも連ならず孤立しているように、私と親しいという噂を立てられて、端の方にぼつんというあの娘が、なんとも愛しくてなりません。